OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March.2020
No. 58

北京、ロンドン、リオデジャネイロに続き、４大会連続となる
東京オリンピックに出場するセーリング男子 RS:X 級・富澤慎選手（関東学院大学 OB）

沖縄での体験学修を通じて地域創生を担う人材を育成
関東学院大学と沖縄大学による連携教育
「沖縄創生まじゅんプロジェクト」

関東学院大学では、国内の大学と提携した「国内留学」プログラムを充実させています。法学部が中心となって推進する「沖縄創生まじゅんプロジェクト」もその一つです。本学と沖縄大学が、自治体や企業と連携し、沖縄の魅力発信や地域振興に寄与する学びを展開。単位互換等により学生が相互に対流・交流する取り組みとして、内閣府の「地方と東京圏の大学生対流促進事業」にも採択されています。プロジェクト担当である木村乃准教授がその概要をお話しくださいました。

関東学院大学 法学部 地域創生学科 准教授
木村 乃（だい）

1989年京都大学法学部卒業後、シンクタンク等を経て2003年度より5年間の任期で神奈川県三浦市役所の政策経営担当の役職を歴任。2010年度より明治大学商学部特任准教授、2018年度より関東学院大学法学部地域創生学科准教授。

長期留学や短期プログラムで沖縄の地域振興を現場体験

沖縄大学と本学は2017年に交流協定を締結しました。その交流をベースに企画された「沖縄創生まじゅんプロジェクト」は、法学部と関わりのある企業や、様々な沖縄の自治体や産業界の協力を得て実現しています。例えば、沖縄県酒造組合の会長を務める佐久本学さんは本学の卒業生であり、泡盛の販促活動を学生が体験するプログラムにご協力くださっています。また、法学部と連携協定を結ぶリコージャパン神奈川支社と、さらに沖縄支社の支援により、テレビ会議システムを通じて授業を大学間で同時中継しています。

本プロジェクトは、留学を基本とする長期プログラムと、夏期休業期間を利用した短期プログラムで構成され、学生は自由に選択できます。2018年度より長期留学と一部のプログラムが開始され、2019年度より本格実施されました。この4月からは2名が沖縄大学に留学するとともに、夏には20名程度の学生が短期プログラムへ参加する予定です。留学する学生の追加の学費はなく、住居の用意や家賃負担も本学が行うなど、じっくりと安心して学べる体制を整えています。沖縄出身の学生が長期留学を活用して沖縄でインターンに参加したり、沖縄へのIターン就職を考える学生が短期プログラムに参加するケースもありますね。応募が定員を超えるプログラムもあり、学生の関心が高まっていることを実感しています。

独自の社会問題や地域性を持つ沖縄で学ぶ意義

沖縄県は失業率と離職率が全国1位である一方、Uターンする人の割合でも1位となっています。また、死亡者数より出生児数が多い日本で唯一の県であると同時に、子どもの貧困率が最も高い県でもあります。様々な社会問題や地域性を持つ沖縄県に学生が行って学び、課題解決や地域振興の現場を体験することが本プロジェクトの狙いです。IターンやUターンの学生を増やしたいとの思いもあり、いずれは就活フェアなどの開催も検討しています。

本学キャンパスで開催するイベントやシンポジウム

昨年11月2日、3日にはプロジェクトの一環として、横浜・金沢八景キャンパスで法学部主催の「うちなーフェア」を開催し、学生や近隣の方々など予想を上回る来場者で賑わいました。また、社会的に注目されているSDGsの視点から、子どもの貧困対策について考察するシンポジウムを同時開催し、その模様は沖縄大学にも同時中継しています。

沖縄創生まじゅんプロジェクトは今後も内容の見直しや充実を図りながら継続していく予定です。多くの学生に参加していただき、地方創生に資する人材の育成につなげていきたいと考えています。

「うちなーフェア」では沖縄フードや物品の販売、ステージ、首里城再建の募金も行われました

子どもの貧困対策を考えるシンポジウムの様子

沖縄創生まじゅんプロジェクト　プログラム例

長期プログラム

■地域創生特論（沖縄）：秋学期15回開講

沖縄大学で開講される地域創生特論（沖縄）を、金沢八景キャンパスに同時遠隔中継。本学でリアルタイムに受講できます。

■長期留学：1年または半年

沖縄大学で履修した科目の単位は、本学の単位として認定されます。

短期プログラム

■沖縄魅力発見プログラム

沖縄大学の教員の講義とフィールドワークで、沖縄の歴史・自然・文化等を体感します。

■地場産業（泡盛）体験型学習

沖縄県酒造組合が取り組む泡盛による産業活性化の現場を学生が体験します。

■沖縄式地域円卓会議

地域の「困りごと」に向き合い共有する、沖縄独自の対話の場「地域円卓会議」に参加します。

※記載されたもの以外にも様々なプログラムを用意しています。
※「まじゅん」とは、「一緒に」を意味する沖縄の言葉です。

STUDENT' S VOICE

1年間の沖縄での体験は必ず人生の糧になる

関東学院大学 法学部 地域創生学科３年
２０１８年度 沖縄大学に留学
外崎 元規（とのさき もとちか）さん

2018年4月から1年間、沖縄大学に留学しました。こんな経験は今しかできないし、純粋に「面白そうだな」と思ったからです。沖縄大学では興味のある科目を履修し、授業以外にも学生の貧困等をテーマにした円卓会議などのプログラムに参加しました。

「せっかく沖縄にいるのだから、やれることは全てやろう」と思い、大学内のイベントを主催するサークルに所属して運営や司会をしたり、大学が提携する学童保育でのボランティアやアルバイト、スキューバダイビングの免許取得など、様々なことに取り組みました。そして、沖縄から戻ってくる時はヒッチハイクをして帰ってきました。以前の自分では考えられない行動で、そうした積極性は今も継続しています。

「沖縄時間」という言葉がありますが、沖縄は横浜と比べ、本当にゆったりとした時間が流れています。また、一族のことを門中（ムンチュー）と呼び、家族間の絆やしがらみのようなものがとても強いことも知りました。やはり現地に行かなければわからないことは多いですね。沖縄で親しくなった人達との交流は今も続いています。将来は沖縄での就職も選択肢の一つに考えています。

「自分の中の何かが変わるかもしれないから、何事もとりあえずやってみよう」。それが1年間の留学から僕が感じたことです。個人の小さな行動が最終的には地域のためになるのかもしれませんし、僕にとって大きな一歩になったと思います。

留学中は沖縄の様々な魅力を体験したり（右上・右下）、学童保育のボランティアで児童達と触れ合った（左）

関東学院大学 建築・環境学部の学生が「建築新人戦2019」最優秀賞を受賞

受賞者の長橋佳穂さんと指導教員の粕谷淳司准教授にお話をうかがいました

全国から552作品が参加 有望な建築家発掘の登竜門

建築新人戦は、全国の大学等の教育機関に所属する学生が授業で取り組んだ設計課題作品を対象とするコンテストです。卒業制作に入る前の学生が応募し、将来有望な建築家になっていく人材を発掘する場でもあります。2019年度は552作品の応募があり、一次審査を突破した100作品が展示され、9月21日に大阪市北区の梅田スカイビルで行われた公開審査で最終候補8作品がプレゼンテーションを実施。建築・環境学部3年の長橋佳穂さんの提案した住宅「こころのすみか」が最優秀賞に選ばれました。

長橋さんは前年度も応募しましたが、一次予選を通過できませんでした。その時の悔しさをバネにして勉強に励み、次こそはと2年連続で挑戦しました。

「以前は、自分のやっていることがどう評価されるのか不安に感じていました。でも、評価を気にして格好つけたりするのではなく、自分が何をやりたいのかを自問自答し、その思いを表現しなければ意味がないと考えて制作に挑みました。公開審査では、他の作品のスケールや技術力に圧倒されましたが、その中で自分の作品を高く評価していただけたことは大きな自信になりました」

関東学院大学 建築・環境学部３年
長橋 佳穂 さん

住む人によって変化し街にあり続ける住宅

長橋さんが授業で提示された課題のテーマは「あり続ける住宅」です。その意図を粕谷淳司准教授は次のように話します。

「日本の建築はスクラップ&ビルドという言葉で表現されるように、壊しては建て直すということを繰り返してきました。それは持続的な街並みを作り出すという意味では決して良いこととはいえません。持続的にあり続けられる自律した建築とは、単に耐久性や環境性能といったスペックだけで語れるものではなく、そうした問題をデザインの観点からも考えてほしいと思い、普遍的で難しい課題ではありますが、あえて学生に問いかけました」

指定された敷地は、かつて違法店舗が建ち並んだ横浜市中区の黄金町。住宅地としては特殊な場所であり、街の人々の様子や、歴史や周辺環境といったコンテクストをいかに読み取るかが重要となります。この難解な課題を長橋さんはどう読み解いて着想を得たのでしょうか。

「あり続けるためには、建物の強度や設備ではなく、街の人から愛され、壊さず守ってもらえるような建築でないといけないと最初に考えました。今の日本の都市には自分の気持ちを表に出せない、どこか冷たい雰囲気があるような気がします。その時々の自分の感情や欲望を大事に包み込んでくれて、時には外へさらけ出せるような場所ができたらと思い、カタチを考えていきました」

できあがった作品のタイトルは「こころのすみか」。特徴的な湾曲したコンクリートの壁を組み合わせ、プライバシーを保ちつつも、住む人と街を歩く人が互いに気配を感じられるように設計されています。

「カーブした壁面が人間の生活や感情を包み込み、守られている安心感があるからこそ、外に出ていこうとする勇気が生まれると思い、あえて壁で閉じ過ぎないようにしました」

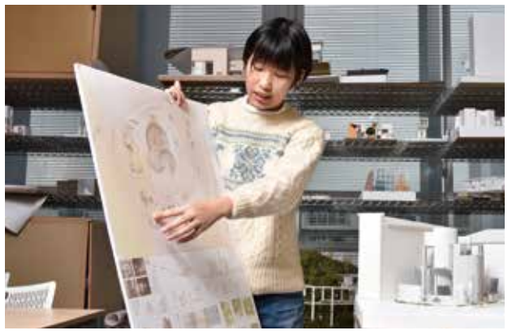
建具や家具、植栽を組み合わせながら、住む人によって建築のカタチが変化することも大きな特徴です。天候や時間によって景色が変化したり、雨の日は家の中に水溜りができるなど、自然を感じられる工夫も取り入れました。

「もしもこの家から人がいなくなってしまった時は、建築の余分な窓や塀は取り除かれ、街の人が自然に寄り付いて井戸端会議ができる立体公園になったらいいなと思います」

一つの住宅で様々なストーリーが展開され、聞いているだけでわくわくします。審査員からは「案と本人に一体感があり、彼女が公共空間などのプロジェクトに挑戦した際、どんなものを作るのかを見てみたい」と最大級の評価を受けました。取材の際もパネルや模型を指し示し、言葉を選びながら丁寧に説明してくれた長橋さん。卒業後は大学院への進学を考えていますが、いずれは海外で勉強したいとの思いもあるそうです。

「若い時はいろんなところに行って荒波に揉まれたいです（笑）。将来的には公共施設等の大きな作品にも挑戦したいですが、常に人の生活や日常に寄り添うようなものを作っていきたいと思います」

あり続ける住宅
「こころのすみか」
建築の持続性や自律性を問う課題に取り組んだ力作。
曲線を組み合わせ曖昧に仕切られた空間により人が包み込まれ、
時には感情を外へと表すことができます。
住む人によって建具や植栽の配置が変化し、街にあり続けることを意識しています。



絵・文章ともに
作家性あふれる
表現が評価された
プレゼンテーションパネル

良い作品というのは、指導教員が想定しているラインを超えて、それを見ている僕らの方が考えさせられてしまうような力を持っています。長橋さんの作品はまさにそうで、人間はなぜ家を建てるのかという根源的なテーマまで考えさせられる力がありました。

長橋さんは何事も一生懸命で、その誠実な態度は作品にも表れています。既存のものを器用にアレンジして見せたものは、どんなに技術力が高くても、審査する側から見ればすぐに新鮮には映りません。長橋さんの作品は、彼女自身がこの建築を必要とし、彼女にしか生み出せないカタチが実現できていることが、審査員の心を打ったのだと思います。審査員のコメントにある「本人との一体感がある」という言葉にもそれが表れています。

関東学院大学 建築・環境学部 准教授
粕谷 淳司
1995年東京大学工学部建築学科卒業。1997年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了。2002年カスヤアーキテクツオフィス主宰。2013年関東学院大学専任講師、2018年より准教授。

キャリアの集大成となるレースで入賞を目指す
関東学院大学卒業生の富澤慎選手がセーリング競技で東京五輪代表に

強力なコーチを迎え今なお進化を続ける

関東学院大学ウィンドサーフィン部のOBである富澤慎選手が、セーリング日本代表として東京五輪に出場します。種目は男子RS：X級（ウィンドサーフィン）で、2008年の北京大会から4大会連続の五輪出場です。富澤選手は昨年、日本セーリング連盟が規定した3つの五輪選考大会で日本人トップの成績を記録。圧倒的な強さで、一枠しかない代表の切符をつかみました。

「4度目の五輪で、しかも自国開催なので、出場が決まったうれしさよりも、これまで応援してくださった皆さんに本番でいいところを見せなくてはというプレッシャーのほうが大きいです」

現在35歳の富澤選手は、ベテランの域に達した今もなお進化を続けています。昨年9月にイタリアで開催された世界選手権では、総合10位という自己最高の成績を記録しました。東京五輪のセーリング会場は江の島。大学時代から鎌倉を練習拠点とする富澤選手にとって、慣れ親しんだ相模湾での飛躍が大いに期待されます。

「体力的な衰えはまだ一度も感じたことがありません。技術や経験が重要な競技なので、五輪や世界選手権では30代のメダリストも多いですね」

海上でニック・デンプシーコーチの指導を仰ぐ

富澤選手はリオデジャネイロ五輪の後、イギリス人のニック・デンプシー氏をコーチに迎えました。現在39歳のデンプシー氏は五輪に5度出場し、アテネで銅メダル、ロンドンとリオデジャネイロで銀メダルを獲得しているセーリング界のレジェンドです。

「それまでも海外で練習する機会は多かったのですが、ニックがコーチになったことで、一緒に練習するメンバーが全く変わりました。ニックの人脈で、世界のトップチームと一緒に練習できることが大きいですね」

デンプシー氏にはリオデジャネイロ五輪の会場で自らコーチを依頼したそうです。

「五輪前に現地で合宿した時、イギリスチームと一緒に練習しました。正直、ニックは近寄り難い雰囲気を持っている人なのですが、どうしてもコーチになってもらいたかったので、思い切って声をかけました」

日本などアジアの選手はこれまで風が強い環境が苦手とされていましたが、デンプシー氏の指導により風が強い条件下でも戦えるようになったことは大きな成果であり、成績にも反映しています。

高2から本格的に取り組み大学時代に大きく開花

富澤選手は高校まで水泳や水球の選手として活動していました。ウィンドサーフィンは、お父さんの影響で子どもの頃から親しんでいたそうです。

「父親がスキーやウィンドサーフィンといったスポーツが大好きで。生まれ育った新潟県柏崎市は海と山に囲まれているので、平日は水泳や水球の練習、週末は家族で海や山に出かけていました。今思えば、水泳や水球で鍛えられたことが、体力のベースになっている気がします」

風の力で海上を滑る疾走感が魅力

ウィンドサーフィンに専念したのは高2の時からです。当時の日本代表クラスの選手に指導してもらったことで実力がどんどん伸び、大学に入学する頃には周囲から頭一つ抜けた選手に成長していました。

「ちょうど高2の時、柏崎市でユニバーシアード大会（通称、大学生のためのオリンピック）の予選があり、その会場で関東学院大学のウィンドサーフィン部の先輩から、うちの大学においでよと誘われたんです。それが進学のきっかけになりました」

大学時代は1～3年次に大学選手権の個人戦3連覇を達成。さらに1～2年次には団体戦連覇に大きく貢献しました。

「周囲の仲間や先生に恵まれ、楽しい大学生活でした。妻は大学の同級生で、自宅も六浦にあるので、今も大学が身近に感じます」

卒業後は関東自動車工業（現・トヨタ自動車東日本）に所属。以来、日本のトップであり続ける富澤選手は、まだ幼い女の子と男の子を育てる父親でもあります。

「海外遠征で家にいない時間が多く、普段は妻に子育てを任せっきりなので、オフの時はほぼ100％家族と過ごしていますね」

波と風を知り尽くした海で自己最高のレースを

地元開催の五輪まで5か月を切りました。初めて五輪を観戦する子ども達の応援も、大きな力となるに違いありません。

「普段一緒に練習してるメンバーや、それこそ関東学院大学の学生達も、セーリングしながら観にいけるくらい近い場所です。家族はもちろん、今までお世話になったスポンサーや所属会社の方達にいいレースを見せたいと思います」

4月から5月はヨーロッパでの大会や練習に参加し、その後は江の島で合宿をして、選手生活の集大成となる五輪に挑みます。

「先のことはまだ決めていませんが、自分としては年齢的にも最後の五輪になるだろうと思っています。確実に入賞したいと思いますし、それを成し遂げるために頑張っています。どんどんチャレンジしてメダルに少しでも近づけるようなレースをしたいですね」

RS：X級は江の島ヨットハーバーを会場に7月26日より実施されます。富澤選手の活躍にご期待ください。

セーリング男子RS:X級日本代表
富澤 慎（まこと） 選手

1984年新潟県生まれ。2007年関東学院大学人間環境学部卒業後、関東自動車工業（現・トヨタ自動車東日本）に所属。
北京（10位）、ロンドン（28位）、リオデジャネイロ（15位）に続き、4大会連続となる東京五輪に出場する。身長182cm、体重72kg。

RS:X級（アール・エス・エックス級）

セーリング競技の1種目であるウィンドサーフィンは、男女ともにRS:X級が五輪正式種目です。全長2.86mのボードを使うRS:X級の最高時速は50kmに達し、風や波などの自然環境も勝敗を左右します。レースは一斉にスタートし、海上に設置されたブイを周回してフィニッシュラインまでの着順を競います。東京五輪では予選ラウンドを4日間行い、上位10選手がメダルレースに進出します。

10年後、20年後を見据えたグローバル人材育成を実践 関東学院六浦中学校・高等学校が推進する「カンボジア サービス・ラーニング研修」

「GO!GLOBAL」を合言葉に、国内外で様々な研修プログラムを実践する関東学院六浦中学校・高等学校。今回は「カンボジア サービス・ラーニング研修」に注目し、その意義や背景を黒畑勝男校長にお聞きするとともに、6年連続で参加した生徒の小泉雄一朗さんに体験談をうかがいました。

現地での活動の拠点となる
SATO JAPAN CENTERにて（2016年）

遺跡近くの貧困地区に住む子どもたちと（2019年）

気づきから主体的に学ぶ 六浦のサービス・ラーニング

日本は今後、経験したことのない少子高齢化と人口減少に直面していきます。同時にAIやロボットの発達により世界のフラット化が進み、日本国内の就労環境にも多文化共生の状況が確実に訪れるでしょう。こうした未来に備えて、六浦中高では総合的な学びとして中2で「地球市民講座」を始め、中3、高1と探究型の学びを重ねていきます。その学びと並行して、感受性が柔軟な若いうちに異文化社会を体験するために、学年横断型での様々なグローバル研修を実践しています。その一つが2014年度から実施している「カンボジア サービス・ラーニング研修」です。12月に約1週間、現地の小中学校を訪問して子ども達と交流したり、遺跡や博物館を見学してカンボジアの歴史や文化に触れていきます。これはボランティア活動ではありません。事前学習に始まり、現地での様々な活動（サービス）で見聞きしたり、触れたりする全ての体験から「気づき」を得て、振り返り学習（ラーニング）により新たな視点を獲得する学習活動です。

出発前後の学習も重視する カンボジア研修の取り組み

出発前には約2か月間の事前学習を行い、生徒達はまずカンボジアについて勉強します。その知識をベースに、自分が取り組みたいテーマを設定し、奉仕活動について主体的に行動計画と準備を進めます。カンボジアの学校には運動会がなく、理科などの授業もありません。生徒達は意見を出し合って、現地の子ども達のために運動会などのイベントや授業を計画し、校内で募金や、文具や日用品などの献品を呼びかけます。そして現地で子ども達と一緒にプログラムを実行します。そこで生徒達は達成感や喜びだけでなく、自分が想像していたこととのギャップや違和感を必ず感じるはずです。例えば、運動会で現地の子どもが真っ先に選ぶ賞品は、文房具や玩具ではなく、生活に必要なサラダ油や洗剤でした。それを目の当たりにした生徒達は「これはどういうことだろう」と考え始めます。私達が最も大切にしている「気づき」であり、サービスとラーニングがつながる瞬間です。帰国後は事後学習や活動報告を行います。この事後活動などを通して新たな目標や自己啓発が生まれます。これが、成長の原動力です。

関東学院六浦中学校・高等学校 校長
黒畑 勝男
1983年北海道立高等学校（英語科専任教諭）
1997年立命館慶祥中学校・高等学校（教頭）
2007年酪農学園とわの森三愛高等学校（副校長）
2014年関東学院入職、同年より現職

アジア諸国の若者達と協働していく力を育成

日本とは対照的に、アジア諸国では経済の著しい発展と人口増加が進んでいます。若いうちに世界を見て、それまでの価値観を捉え直す経験も重要です。来たる多文化共生社会では、自分の知識や経験だけでなく、周囲と協働して新しい知識や情報を生み出しながら問題を主体的に解決していく力が必要です。その力の育成には、自ら課題を洗い出して取り組もうとする姿勢を育てることが重要ですが、それは今の日本の教育に最も足りない部分ではないかと思います。優れた数理的能力や言語力があっても行動を始めるのに指示を待つ習慣を身につける学び方が教育となっていることが多いと思うのです。六浦のサービス・ラーニング研修は、主体的な力を育むために大いに役立つ学び方です。

関東学院六浦高等学校 3年 小泉 雄一朗さん

中1から6年連続参加 行くたびに新たな発見

中高6年間、毎年カンボジア研修に参加しました。最初は中1の時、母に勧められたことがきっかけです。携帯電話でカンボジアについて調べてみると、地雷や貧困などの言葉が出てきて、「結構すごい国だな」と思ったことを憶えています。中1での参加者は僕一人で、初めての海外旅行でもあり、先輩達についていくだけで精一杯でした。それでも初めて目にしたカンボジアの貧困の実態は強く心に残っています。そして、自分がいかに恵まれているかを実感しました。帰国してからも、幸せすぎるのではないかと悩んでしまったほどです。

それ以降、毎年参加するたびに新しい発見があります。1年目は言葉の壁にぶつかり、うまく会話ができなかったので、中2の時にはクメール語を学んで行こうという目標ができました。現地の人からすれば自分達のクメール語はめちゃくちゃかもしれませんが、自分なりに努力して勉強し、ジェスチャーも交えつつコミュニケーションが取れるようになりました。

目覚ましく変化する カンボジアの今を実感

6年の間にカンボジアは大きく変貌しました。中1の時、プノンペン国際空港は田舎の空港のようだったのが、年々工事が進み、今では羽田空港のようにきれいに整備されています。ぬかるんだ道路も舗装されて、夜になると真っ暗だった街にはライトや大型ビジョンが設置され、建設中だったビルも次々完成して、急速に発展していく様子を目の当たりにしました。

子ども達にも変化がありました。毎年、遺跡のある町までボートに乗っていくと、現地の子ども達が船着場に20人くらい集まって一緒に遺跡まで登っていくのですが、昨年度は5、6人に減っていました。近くに学校ができて、そこに通う子が増えたからだそうです。少し寂しくもありましたが、子ども達にとっては喜ばしいことなのだと思いました。また、その時来てくれた子ども達の中に、前年に一緒に写真を撮った子がいました。写真を見せてジェスチャーで会話し、言葉を乗り越えて心で通じ合えた気がします。6年間で一番印象に残っていることです。

連続参加、現地スタッフとも言語の
垣根を越えた間柄に（2015年）

4回目のカンボジア、中学生に
とっては頼りになる先輩（2017年）

遺跡の子どもたちとは
「年に一度会う友達」（2019年）

カンボジアと日本の 架け橋になることが夢

僕自身、この研修でとても成長し変わったと思います。中1までは人と話すことが苦手だったのですが、カンボジアの子ども達や一緒に行った仲間とのコミュニケーションを通じて、自分でも驚くほど積極的になりました。高2からはリーダーを務めるなど、充実した6年間を過ごすことができ、先生や親には心から感謝しています。

カンボジアと日本の架け橋になることが、今では自分にとって当たり前の目標になりました。将来は観光関係の仕事に就きたいので、4月から大学でも専門的に学びたいと考えています。そして僕自身の経験も踏まえて、中高生達にサービス・ラーニングの大切さを広めていきたいと思います。

フラガールズ甲子園で神奈川県勢として過去最高の全国3位
関東学院高等学校ダンス部の活動を紹介

5度目の挑戦で悲願の上位入賞

昨年8月18日に福島県のいわき芸術文化交流館アリオス・大ホールで全国高等学校フラ競技大会「第9回フラガールズ甲子園」が開催され、関東学院高等学校ダンス部が3位（優秀賞）に輝きました。

フラガールズ甲子園は、全国から集まった高校生がフラの日本一を競う大会。開催地の福島県いわき市は、映画「フラガール」の舞台であり、スパリゾートハワイアンズがある「フラのまち」として知られています。第9回大会は、秋田県から沖縄県まで史上最多となる26校、278人のフラガールズが出場。課題曲と自由曲で、日頃の練習の成果を披露しました。

関東学院は2015年から毎年出場。初出場の際に新人賞を受賞しましたが、以降は、福島県勢を中心とする強豪の壁に阻まれ、上位入賞を果たせずにいました。今回は高3が2人、高2が4人、高1が4人という10人編成で臨み、5度目の挑戦でついに快挙を達成しました。当時部長としてチームを引っ張った増田結衣穂さん（高3）は「私にとって最後となるフラガールズ甲子園。どんな賞でもいいから取りたいと思っていましたが、まさか3位に選ばれるとは想像もしていませんでした。頑張ってきて良かったと思います」と喜びを振り返ります。

受賞後に顧問の石井教諭を囲んで

同じく高3で副部長だった佐藤陽奈子さんは、「受験勉強に入っているので、例年だと高3は出場しないのですが、高1から2度の悔しい思いを経験し、今度こそと出場を決めました。出させてもらうからには何かカタチを残したかったので、責任を果たすことができたかなと思います」と当時の心境を語ります。

表現力を強みとして福島の強豪勢に挑戦

今回、上位5校のうち、関東学院以外の4校は福島県勢でした。フラが盛んな福島県からは毎年多くの強豪が出場しており、30人近い大人数の編成を生かしたダイナミックな演技と技術力が特徴です。これに対して、10人で挑んだ関東学院の持ち味は、細やかな表現力。生徒達はハワイ語の歌詞を和訳して意味を理解し、見ている人達に思いが届くよう、指先の動きから首の角度まで研究して、表現力を極めてきました。現部長の小島咲さん（高2）は「迫力では福島のチームには及ばないかもしれませんが、繊細な動きにこだわり、全体の美しさで勝負しました」と話します。

明るく生命力に溢れた曲に合わせ、変幻自在の華やかなフォーメーション、流れるようなステップ、指先まで感情を込めた動作、いきいきとした笑顔で観客を魅了した10人。センターで踊った伊藤那菜さん（高2）の「あまり緊張せず、楽しんで踊ることができました」という言葉からは、チームの雰囲気の良さや練習で培った自信が伝わります。

指先まで思いを込めてエキシビションにも出場

ハワイ語で踊りという意味を持つフラ（hula）は、手話のように、振りの一つひとつに意味があり、伝えたい想いを、動きで表現することができます。創部以来、顧問を務めている石井奈津希教諭（現在育休中）は、そうしたフラの素晴らしさを生徒達に伝え、踊りを指導してきました。大会当日、石井教諭は既に臨月を迎えていましたが、遠征に参加してチームをサポート。先生の強い思いが、最後に力を与えてくれたと生徒達は口を揃えます。

「表現力は関東学院の強みであり、石井先生がすごく大事にしてきたものです。その思いに応えようと頑張りました」（増田さん）

競技翌日には、上位入賞校としてエキシビションに出場。フラガールズの聖地であるスパリゾートハワイアンズのステージで、大勢の観客を前に笑顔で堂々と自分達のフラを披露し会場を盛り上げました。

スパリゾートハワイアンズでのエキシビション

創部から6年目の飛躍ダンス部の歩み

2015年に同好会として発足し、翌年にダンス部へ昇格。普段は中高合同で活動しています。チーム名は「ゴールデンハワイアンズ」。学校の最寄り駅の黄金町にちなんで名付けられました。

2019年度はゴールデンハワイアンズにとって躍進の年となりました。6月には横浜大さん橋ホールで開催された「太平洋文化芸術祭 学生・生徒のフラコンペティション」に、中高合同チームで出場。大学生チームも出場する中で見事優勝を果たしました。ここで得た自信が、フラガールズ甲子園での好成績にも結びついています。

フラで人々を笑顔に自らも成長する場

生徒達は、「ダンス部は全員が主役になれて、一人一人が輝ける場所」だと言います。

「自分の可能性に気付き、新しいことに挑戦し、目標に向かって諦めずに努力することの大切さを、身をもって体験して欲しい。だから、精一杯頑張りなさい」と石井教諭も日頃から指導をしているそうです。

そんなダンス部の活躍の場は、競技大会だけではありません。地域の方々との繋がりを大切に、近隣の老人ホームでのボランティア、お祭りや大型商業施設等でのステージなど、フラを通じた様々な活動を実践しています。

「私はフラを踊ることが好きなので、イベントに呼んでくださったり、自分達のフラを見に来てくださる人がいると、すごく嬉しいです」（伊藤さん）

フラを通じて人の役に立ったり、喜んでいただく経験は、生徒達にとってかけがえのない学びです。地道な活動により、学内だけでなく、今では地域の方々からも愛される存在となっています。

「たくさんの方に期待されているし、応援もしていただいています。それに応えられるように頑張っていきたいです」（小島さん）

これからも関東学院らしい明るく元気なフラで、多くの人を楽しませてくれることでしょう。ゴールデンハワイアンズのさらなる活躍に期待しています。

「フラガールズ甲子園」自由曲での弾ける笑顔と躍動感ある演技

グリーンの衣装が映える課題曲での演技

昨年は2大会で功績。中央は太平洋文化芸術祭の優勝杯

老人ホームでのボランティア

一人ひとりが心から輝ける場所！ 中高合同で活動するダンス部

全国高校生歴史フォーラムで関東学院高等学校の生徒が優秀賞
潜伏キリシタンの生活に独自の視点で迫り高評価

「地歴の甲子園」に挑戦 奈良大学で研究成果発表

奈良大学と奈良県が主催する「第13回全国高校生歴史フォーラム」で、関東学院高等学校3年の土野英一郎さん（歴史研究部）が優秀賞に選ばれました。このフォーラムは、暗記科目と思われがちな歴史について、全国の高校生が自ら設定した課題を調査し、探求の楽しさを実感する目的で開催されています。2019年度は応募総数143編のうち、5編のレポートを優秀賞に選出。土野さんは昨年11月23日に奈良大学に招待され、研究発表を行いました。タイトルは「キリシタン信仰と地域コミュニティー～長崎県外海・平戸地区を中心に～」です。

歴史研究部顧問の水谷安昌教諭と表彰式に参加

「関東学院小学校の頃から聖書や礼拝の時間が学校生活の一部となっていました。高2の聖書の授業で、潜伏キリシタンについて学んだ際、宗教が『命の尊さを説くこと』に対し、『命がけで信仰を守ること』は矛盾するのではないかと疑問を持ち始めました。そこで、信仰に命をかけた人達の宗教観や、その原動力、地域社会との関わりなどを調べることにしました」

調査地域は、遠藤周作の小説「沈黙」の舞台になった長崎県外海地区と、フランシスコ・ザビエルが布教の拠点とした平戸地区。現地での聞き取り調査や、膨大な文献を基に、潜伏キリシタンの人々の生活を見つめていきました。

現地調査で多くの人や史跡を訪ねた

「今も潜伏キリシタン時代の信仰を守り続ける人々や研究者を訪ね、資料館や史跡にも足を運びました。文献に関しても、村役人、潜伏キリシタン、宣教師など、様々な立場の人が残した記録を照らし合わせ、多角的に考察しています」

今回のレポートは、土野さんが部長を務めた歴史研究部が、2018年秋に「神奈川県高等学校社会科研究発表大会」で発表した潜伏キリシタンに関する研究をベースに、さらなる考察を加えて完成させました。「レポートとして残すことで、卒業後も後輩達に見てもらえる」と語る土野さん。研究を通して最も伝えたかったことは何でしょうか。

「潜伏キリシタンにとっての信仰は、本来のキリスト教に加え、その根底に〝祖先崇拝〟があり、それが信仰を受け継いでいく原動力となったのではないかと考えました。同時に、現代社会における高齢化や少子化等の問題で、潜伏キリシタンの伝統が消失しかねない現状と、地域文化を伝承していくことの重要性を訴えたかったですね」

4月から大学生となる土野さんは、今後も研究を継続していくそうです。

関東学院高等学校 3年 歴史研究部 土野（ひじの） 英一郎さん

全日本学生ボードセーリング選手権・個人戦
ウィンドサーフィン部の関港大選手が優勝

初心に立ち返り 念願の学生日本一に

昨年11月15日～18日に沖縄県で開催された全日本学生ボードセーリング選手権・個人戦で、関東学院大学ウィンドサーフィン部の関港大選手（人間共生学部2年）が優勝しました。この大会は「テクノ293クラス」という全長293cm、最大幅79cmのボードを用いた種目で競われます。3日間で9本のレースが行われ、関選手は初日からトップを守り、全国から予選を勝ち抜いた110選手の頂点に立ちました。

関選手は昨年度も出場して優勝を狙いましたが、初めての沖縄の風に苦戦し、入賞をも逃した苦い経験があります。

「昨年度は勝負にこだわり過ぎて、ウィンドサーフィンの楽しさを忘れかけていた気がします。今回は初心に戻って、とにかく楽しもうと思いました。初日は得意な中風域で、1本目でうまく走れて2位につけたことで気持ちが落ち着き、勢いに乗れました」

ボードをコントロールして海面のブイを回る関選手

2日目は接戦となるも、僅差で1位をキープ。最終日は1本でも負けると優勝を逃す苦しい状況の中、ミスなく帆走し、ライバルを引き離しました。

「3日間ずっと優勝圏内にいたので、緊張とプレッシャーの連続でしたが、最後まで思い切ってレースに臨めました。最終レース、ゴール手前で優勝を確信した時は、今までやってきた努力が報われた思いや、競技を続けさせてくれた両親への思いが込み上げてきて、うるうるしてしまいました」

優勝旗を手に笑顔がこぼれる

主将として 団体戦でも優勝が目標

横浜市で生まれ育った関選手が、ウィンドサーフィンを始めたのは高校1年の時。中学まで野球をしていましたが、高校で坊主頭になるのが嫌で、別のスポーツを探したのだそうです。海が好きだったのでウィンドサーフィンに興味を持ち、鎌倉にあるスクールに通い始めました。

「どんどん上達していくのが自分でもわかったので楽しかったですね。関東学院大学も同じ場所で活動していたので、練習に混ぜてもらったことが、進学のきっかけになりました」

関東学院大学 ウィンドサーフィン部 主将
人間共生学部 共生デザイン学科 2年
関 港大（みなと） さん

12月からは主将を務め、2月28日～3月2日に和歌山県で開催される全日本学生ボードセーリング選手権・大学対抗戦（団体戦）では優勝を目指します。

「後輩にも実力のある選手がいるので、今年は十分に可能性があると思います」

しっかりコミュニケーションを取って、皆を引っ張っていきたいと語る関選手。今秋には個人戦の2連覇にも期待が高まります。

ソングライターであり母校・関東学院大学では授業も担当
保育士の経験を活かし「あそびうたを心の架け橋に」

夢は世界中で歌われるあそびうたを作ること

「あそびうた」とは、曲に合わせて手や体を動かしたり踊ったりなど、遊びと歌が一つになったものです。あそびうた作家として活躍する福田翔さんが作曲やギターを始めたのは、高校1年の時。音楽ユニット「ゆず」の影響で、友人と一緒に演奏したり、オリジナルの歌を作っていたそうです。子どもと関わる仕事に就こうと思い、関東学院大学人間環境学部人間発達学科（現・教育学部）に進学。卒業後は保育士の道へ進みました。

「僕はピアノが苦手だったので、ギターを使って子ども達と童謡を歌っていました。ギターなら子ども達と向き合って歌えるし、やがてオリジナルのあそびうたを作るようになりました」

保育士の仕事をしながら、休日には親子が集まるイベントやお祭りで歌を披露していた福田さん。ある時、「A1あそびうたグランプリ」という大会に参加して大きな刺激を受けたそうです。

「学校や園の先生、子育て中のお母さんなど、全国の様々な人達が、子ども達のために良いものを作ろうと活動していることを知り、あそびうたを本気でやりたいという気持ちが溢れてきました」

大勢の子どもを前に笑顔で歌う福田翔さん

8年間保育士として勤務した後、一大決心して2014年にフリーランスのあそびうた作家に転身します。

「息子は当時まだ1歳。それでも妻は、やりたいのなら応援するよと言ってくれました。今も感謝しています」

最初は仕事が少なく、所属事務所のソングブックカフェの社長が、ロードマネージャーの仕事を与えてくれたり、色々とサポートしてくれました。現在は軌道に乗り、全国の園や児童館等でのコンサート、親子イベント、幼稚園教諭や保育士向けの講習会、さらにCD制作、テレビ番組等への出演や楽曲提供など多忙な日々を送っています。

「保育士の経験も活かし、日々の育児や保育に役立つ歌を作っています。子どもと大人が一緒に楽しみ、手遊びやふれあい遊びを通して絆を深めてほしいと思います」

そんな福田さんは2019年の秋から関東学院大学で「保育内容指導法・表現Ⅱ」という授業を担当。音を使った子どもの遊びについて指導しています。

「母校で教える立場になるとは夢にも思っていませんでした。新年度からも開講するので、一人でも多くの学生さんに受講していただきたいです」

〝あそびうたを心の架け橋に〟をモットーとする福田さんの夢は、日本はもちろん、世界中で歌われるあそびうたを作ること。これからの福田さんの活躍にご注目ください。

あそびうた作家
福田 翔 さん

関東学院大学人間環境学部人間発達学科卒業後、
8年の保育士経験を経て、
2014年よりあそびうた作家として活動。
現在、教育学部こども発達学科で授業を担当中。
2018年2月NHK「おかあさんといっしょ」の歌
「おはよう！」の作詞作曲を手がける。
BS日テレ「それいけ！アンパンマンくらぶ」
きょうのうたコーナー出演中（不定期）。

関東学院大学×崎陽軒×横浜ウォーカーのコラボ企画から誕生
「横濱の灯り」を崎陽軒店舗にて販売しています

学生の自由な発想を企業のノウハウで具現化

関東学院大学経営学部が社会連携プラットフォーム「K-biz」の一環として、崎陽軒、横浜ウォーカーとコラボして開発した「横濱の灯り」が昨年11月1日に発売されました。

「横濱の灯り」は、ガス灯にともる光をイメージした、あたたかな色合いのお菓子です。レモン・あんず・ラズベリー3種のフルーツジャムを白餡と、もっちり柔らかな食感の生地で包んでいます。カラフルな見た目ですが、天然着色料のみを使用しているので、安心して家族で楽しんでいただけます。特にあんずは、シウマイ弁当でもおなじみのフルーツ。崎陽軒ファンの方ならぜひ味わっていただきたいフレーバーです。

学生チームの一員として開発に携わり、パッケージのイラストも担当した経営学科4年の安藤友哉さんは「細部までこだわったため時間を要しましたが、イメージ通りのものができて大変うれしく思います。見た目と味、両方を楽しんでいただければ」と商品をアピールしてくれました。真保智行准教授は「学生達には大きな挑戦でしたし、崎陽軒さんにとっても、カラフルな商品展開やもちっとした食感など、従来にない新たな試みであったと思います。学生の提案に対して真剣に取り組んでいただき感謝しています」とプロジェクトを振り返ります。

横浜の新名物として、長く愛されるお菓子を目指して開発した「横濱の灯り」。手みやげ、自宅でのティータイムなど、幅広い場面でお楽しみください。

商品開発に携わった
安藤友哉さん（4年）と
真保智行准教授

横濱の灯り

- 内容……6個入り（レモン・あんず・ラズベリー各2個）
- 価格……700円（税込）
- 賞味期限……製造日を含め15日間（常温保存）
- 取扱店舗……神奈川・東京を中心とした崎陽軒約150店舗および通信販売 関東学院大学 購買部（注文制）
- お問い合わせ……崎陽軒お客様相談室 0120-882-380 月～土曜9:00～20:00 日曜9:00～18:00

プロジェクトの発端と経緯

一昨年3月に崎陽軒創業110周年・シウマイ誕生90周年を記念して、KADOKAWAより発行された「崎陽軒ウォーカー」の誌面企画がきっかけとなり、関東学院大学、崎陽軒、横浜ウォーカーがコラボして新たな横浜名物を開発するプロジェクトが始動。経営学科の学生による商品企画案を募集し、真保智行准教授のゼミナールに所属する学生チームが提案した「横濱の灯り」が採用されました。その後、学生達と崎陽軒で何度も打ち合わせや改良を重ね、商品化を実現しました。

広報から

日本代表が史上初のベスト8進出を果たし、日本中を熱狂に包み込んで幕を閉じたラグビーワールドカップ2019の決勝は横浜で行われ、出場国のユニフォームを身につけた多くの外国人観光客が横浜を行き交いました。7月にいよいよ開幕する東京2020オリンピック・パラリンピックでは神奈川県も会場のひとつとなっており、野球、ソフトボール、サッカー、ウィンドサーフィンなどが行われ、ラグビーワールドカップ以上の外国人の訪日が予想されています。スポーツ庁は、スポーツを「みる」「する」「支える」スポーツ参画人口の拡大を掲げています。スポーツは、競技種目だけでなく、野外活動やスポーツ・レクリエーション活動も含みます。スポーツを「する」ことは技術レベルや年齢を問わず幅広くとらえることができ、例えば、ウォーキングをすることで心身の健康が保たれること、仲間と競技をすることで絆が深まることが挙げられます。また、多くを犠牲にし、国の代表として戦う選手の姿を「みる」ことで感動が生まれることや、好きな選手やチームを応援することによってその選手やチームの力となり「支える」ことへと繋がります。このようにスポーツは、私たちの身近なところから関わることができ、子どもたちに夢や希望を与えることができるのではないでしょうか。

東京オリンピック2020には、江の島で行われるウィンドサーフィンに関東学院大学OBの富澤慎選手が出場します。波と風を知り尽くした地元の海での活躍が期待されます。皆様、ご声援よろしくお願い致します。

関東学院大学 広報課　（045）786-7049 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

・編集：関東学院大学 広報課　・写真：藤間 久子、森 日出夫（アマノスタジオ）　・文章：坂尾 基子　・デザイン：髙橋 稔、竹本 真実（株式会社CCN）

お知らせ

横浜・関内キャンパス開設にともなうご支援のお願い

関東学院大学では2022年4月の
横浜・関内キャンパス開設に向けて準備を進めています。
ヒト・モノ・コトが集積する横浜市都心部に、新たな拠点を開設することで、
関東学院大学が取り組む「社会連携教育」をより推進していきます。
社会連携教育を推進することで、これからの時代で求められる、多様な人々と
協働しながら、新しい価値を生み出していく人材の育成をめざします。
また、新キャンパスでは、学生だけでなく企業・自治体・市民などに開かれた
教育プログラムを展開。社会に開かれたキャンパスとして、ホール、
コワーキングスペース、ブックカフェなどの施設の市民開放も予定しています。
関東学院大学では、新キャンパスを軸に、地域の新たな原動力となり、
大小様々なイノベーション拠点として、多様な機能を社会に提供していきます。
関東学院大学の新たなチャレンジに、
多くの皆様にお力添えをいただければ幸甚です。
新キャンパスの開設に向けた、
あたたかいご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

寄付に関するお問合せ

学校法人関東学院　募金・校友課
236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
tel 045-786-2685　fax 045-786-5729
bokin@kanto-gakuin.ac.jp

募集期間

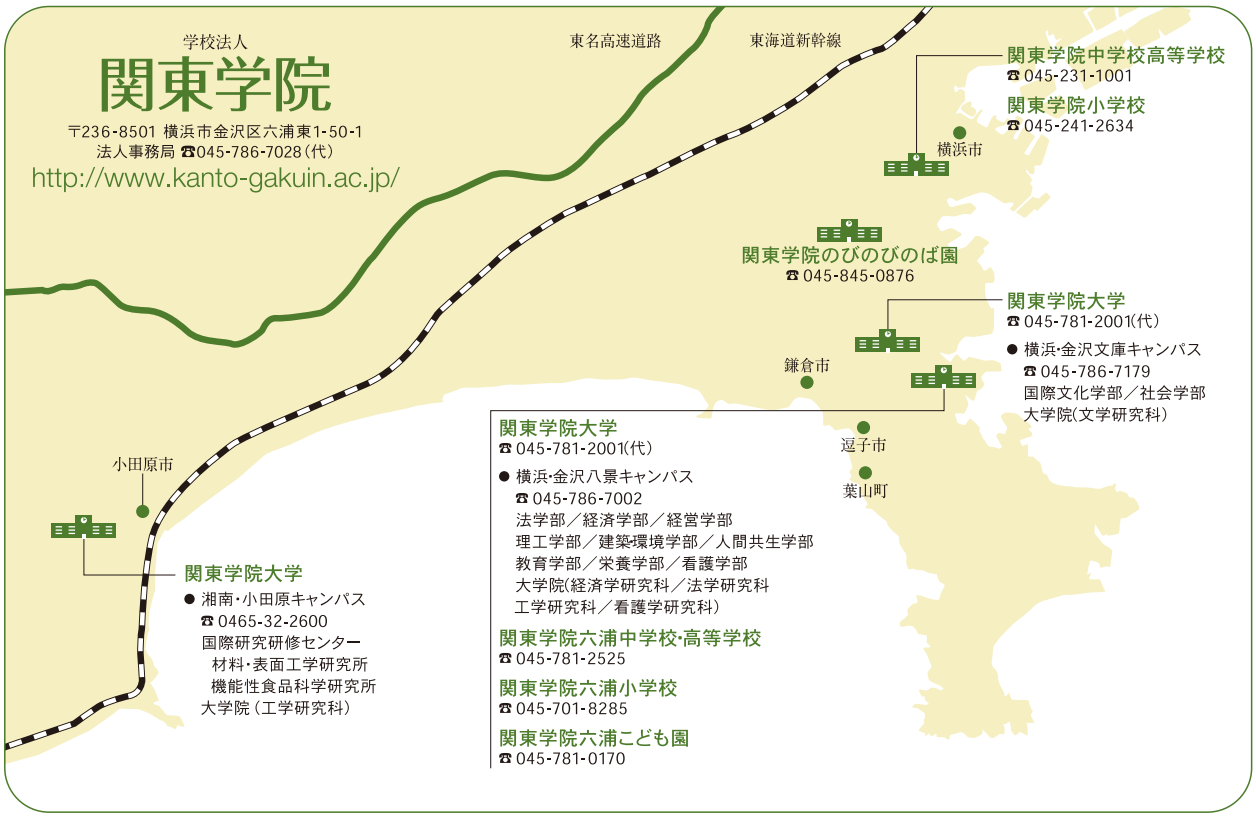
2019年4月1日～2022年3月31日
詳細は、学院サイト（http://www.kanto-gakuin.ac.jp/?support=p581）をご覧ください。

顕彰銘板

10万円以上の寄付者には、キャンパス完成後に銘板へご芳名を記し、末永く顕彰いたします。

税制上の優遇措置について

学校法人関東学院に対する寄付は、特定公益増進法人への寄付金として、寄附金控除の措置を受けることができます。
※入学（園）された年内に新入生保護者および新入生が寄付をされた場合は、
「入学に係る寄付金」とみなされて寄附金控除の対象になりませんので、ご留意ください。



関東学院学報 第58号 2020年3月1日
発行・関東学院　編集：関東学院大学広報課